

第1問 (20点)

下記の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は、次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

現金	当座預金	普通預金	受取手形	売掛金
貸倒引当金	貸付金	前払金	未収入金	仮払金
備品	減価償却累計額	支払手形	買掛金	前受金
借入金	未払金	仮受金	預り金	売上
受取手数料	受取利息	雑益	貸倒引当金戻入	償却債権取立益
固定資産売却益	仕入	支払手数料	支払利息	貸倒引当金繰入
貸倒損失	減価償却費	租税公課	雑損	固定資産売却損

1. 当期に発生した売掛金 ¥ 300,000 が貸し倒れた。なお、貸倒引当金の残高は ¥ 220,000 である。
2. 備品（取得原価：¥ 300,000、残存価額：ゼロ、耐用年数：6年、償却方法：定額法、記帳方法：間接法）を4年間使用してきたが、5年目の期首に ¥ 120,000 で売却した。売却代金の半分は当店振り出しの小切手で受け取り、もう半分は月末に受け取ることにした。
3. 仕入先伊沢商店に注文していた商品 ¥ 400,000 を引き取った。注文時に支払った手付金 ¥ 150,000 を差し引いた残額は、伊沢商店あての約束手形を振り出して支払った。
4. 仮受金として処理していた内容不明の当座入金額 ¥ 30,000 は、前期に貸し倒れ処理していた売掛金の一部回収額であることが判明した。なお、貸倒引当金の残高は ¥ 50,000 である。
5. 源泉徴収した7月から12月までの所得税 ¥ 179,340 を、所轄の税務署の納税窓口にて現金で納付した。なお、当社は前期より納期の特例承認を受けている。

第2問 (10点)

当期（平成29年4月1日～平成30年3月31日）中の受取地代に関する勘定の記入は以下のとおりである。各勘定から取引を推定し、①～⑥には下に示した語群の中から適切な勘定科目を選択して記入するとともに、⑦～⑩には適切な金額を記入しなさい。

受取地代、前受地代、未収地代、前期繰越、次期繰越、損益

受取地代			前受地代								
3/31	損	益	4/1	①	⑦	4/1	③	120,000	4/1	④	120,000
/			5/31 現金 360,000								
			3/31 ②			⑧					
?			?								
未収地代			損 益								
3/31	⑤	240,000	3/31	⑥	240,000						
						3/31 受取地代 ⑩					

第3問 (30点)

以下に示した水上商店の【資料Ⅰ：平成30年3月中の取引】と、答案用紙の平成30年2月28日の合計試算表にもとづいて、平成30年3月31日の合計試算表と売掛金・買掛金の各明細表を作成しなさい。

【資料Ⅰ：平成30年3月中の取引】

- 1日 以前に受け取った約束手形 ¥ 80,000 が支払期日となり、普通預金口座に入金された。
- 5日 郵便切手 ¥ 4,100 と収入印紙 ¥ 2,000 を購入し、代金は現金で支払った。なお、この郵便切手と収入印紙はただちに使用した。
- 7日 店舗を拡張するため、銀行から年利率4%、借入期間6か月の条件で ¥ 300,000 を借り入れ、利息(月割計算)を差し引かれた残額を当座預金口座に預け入れた。
- 11日 渡辺商店から商品 ¥ 99,000 を仕入れ、代金のうち ¥ 79,000 は同店宛ての約束手形を振り出し、残額は掛けとした。なお、引取運賃 ¥ 1,000 は現金で支払った。
- 12日 須貝商店から商品 ¥ 92,000 を仕入れ、代金のうち ¥ 22,000 は先に支払っていた手付金と相殺し、残額は掛けとした。
- 14日 渡辺商店に対する買掛金 ¥ 40,000 を支払うため、保有していた郵便為替証書を渡した。
- 15日 現金過不足の原因の一部が旅費交通費 ¥ 8,000 の記入漏れであることが判明した。
- 17日 以前に振り出した約束手形 ¥ 65,000 が支払期日となり、当座預金口座から引き落とされた。
- 18日 福良商店に商品 ¥ 182,000 を販売し、代金のうち ¥ 88,000 は同店振り出しの約束手形を受け取り、残額は掛けとした。なお、発送費 ¥ 3,000 (当方負担) は現金で支払った。
- 20日 川上商店に商品 ¥ 150,000 を販売し、代金のうち ¥ 80,000 は先に受け取っていた手付金と相殺し、残額は掛けとした。なお、発送費 ¥ 4,000 (先方負担) は現金で支払い、掛け代金に含めて処理した。
- 21日 渡辺商店から商品 ¥ 45,000 を仕入れ、代金は掛けとした。なお、引取運賃 ¥ 2,000 は現金で支払った。
- 22日 川上商店へ20日に販売した商品のうち、¥ 6,000 が品違いのため返品されたので、同店に対する売掛金と相殺した。
- 24日 福良商店に商品 ¥ 165,000 を販売し、代金のうち ¥ 80,000 は当店振り出しの約束手形を回収し、残額は掛けとした。なお、発送費 ¥ 2,500 (当方負担) は現金で支払った。
- 25日 従業員に対する給料 ¥ 200,000 の支払いにあたって、従業員に対する立替金 ¥ 25,000 と所得税の源泉徴収分 ¥ 5,000 を差し引き、残額を普通預金口座から振り込んだ。
- 26日 渡辺商店から21日に仕入れた商品の一部に品違いがあったため、同商品 ¥ 3,000 を返品し、同店に対する買掛金と相殺した。
- 27日 須貝商店に対する買掛金 ¥ 51,000 を小切手を振り出して支払った。
- 28日 福良商店に対する売掛金 ¥ 80,000 を現金で回収した。

第4問 (10点)

以下の【資料】にもとづいて各勘定に必要な記入を行ったうえで、①～⑩に当てはまる適切な勘定科目または金額を答えなさい。なお、当期中の仕入・仕入戻し・売上・売上戻りは全部一括して記帳し、売上原価は売上原価勘定で計算すること。

【資料】

- (1) 期首商品棚卸高 : ￥ 380,000
- (2) 総仕入高 : ￥ 4,900,000
- (3) 仕入戻し : ￥ 60,000
- (4) 純売上高 : ￥ 6,820,000
- (5) 売上戻り : ￥ 80,000
- (6) 期末商品棚卸高 : ￥ 480,000

仕 入			
	総仕入高	()	
			仕入戻し ()
			3/31 (①) (②)
		()	()
売 上			
	売上戻り	()	総売上高 (④)
3/31	(③)	()	
		()	()
売上原価			
3/31	()	()	3/31 (⑤) ()
"	()	()	" () (⑥)
		()	()
繰越商品			
4/1	前期繰越	380,000	3/31 () ()
3/31	()	()	" (⑧) ()
		()	()
4/1	前期繰越	(⑦)	
損 益			
3/31	(⑨)	()	3/31 () (⑩)

第5問 (30点)

会計期間を1月1日から12月31日までとする河村商店の、平成30年度末における次の【決算整理前残高試算表】および【決算整理事項等】にもとづいて、答案用紙の貸借対照表と損益計算書を完成させなさい。

【決算整理前残高試算表】

決算整理前残高試算表

平成30年12月31日

借方	勘定科目	貸方
1,047,400	現金	
	現金過不足	5,000
821,500	普通預金	
479,600	受取手形	
545,800	売掛金	
245,000	繰越商品	
2,700,000	建物	
800,000	備品	
	支払手形	383,700
	買掛金	403,300
	貸倒引当金	50,000
	建物減価償却累計額	540,000
	備品減価償却累計額	400,000
	資本金	4,500,000
	売上	2,696,100
	受取家賃	117,000
	受取手数料	10,200
1,792,800	仕入	
440,000	給料	
152,200	広告宣伝費	
81,000	保険料	
9,105,300		9,105,300

【決算整理事項等】

- 現金過不足の原因を調査した結果、広告宣伝費 ¥ 3,200 の支払い、および手数料の受取額 ¥ 6,800 が未記帳であることが判明した。
なお、残りの金額は原因が不明なので、決算において適切な処理を行うこととした。
- 得意先 QK 商店が倒産し、前期の同店に対する売掛金 ¥ 8,500 と、当期の同店に対する売掛金 ¥ 4,900 が回収不能となったが、この取引が未記帳であることが判明した。
- 決算日の前日に掛けで販売した商品に品違いがあり、売価 ¥ 12,000 (原価 ¥ 10,000) の商品が返品されたが、この取引が未記帳であることが判明した。
- 期末商品棚卸高は ¥ 200,000 である。なお、この期末商品棚卸高には上記の返品分は含まれていない。
- 建物 (耐用年数は30年、残存価額はゼロ) および備品 (耐用年数は4年、残存価額はゼロ) について定額法により減価償却費を計上する。
- 給料の未払分が ¥ 40,000 ある。
- 受取手形と売掛金の期末残高に対して、差額補充法により4%の貸倒引当金を設定する。
- 保険料はかねてより所有している建物に対するもので、毎年同じ金額を7月1日に向こう1年分支払っている。
- 受取家賃は、所有する建物の一部の賃貸によるもので、奇数月の月末にむこう2か月分として ¥ 18,000 を受け取っている。